中国における葬礼の地域差と歴史的変化ー伝統の継承と変容ー

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2017-10-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 山本, 恭子, Yamamoto, Kyoko
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/43781

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

様式　7（Form 7）

学　位　論　文　要　旨
Dissertation Abstract

学位請求論文題名 Dissertation Title

中国における葬礼の地域差と歴史的変化－伝統の継承と変容－

（和訳または英訳）Japanese or English Translation

Regional Difference and Historical Change in Chinese Funeral Rites: The Inheritance and Transformation of Tradition

人間社会環境学　専　攻（Division）

氏　　名（Name）　山本　恭子

主任指導教員氏名（Primary Supervisor）　岩田　礼

（注）学位論文要旨の表紙
Note: This is the cover page of the dissertation abstract.

要旨

本論文は、近世以後に民間で独自の発展をした伝統葬礼習俗について、その地域差を明らかにしながら、歴史的変化を考察することを目的とした。中国における葬礼は、中華人民共和国成立後、火葬の推進や墓地改革等の「殯葬改革」が進められて変化したとされる。本論文でいう「伝統葬礼」とは、殯葬改革の影響による変化が生じる以前、即ち清末から民国期に民間で行われていた葬礼を指す。また、江蘇省北部地域における聞き取り調査の結果に基づき、伝統葬礼の当代葬礼への継承と変容の現状について報告した。

第一章ではまず、中国人の霊魂観とそれを反映した葬礼の意義について述べた。次に本論文の目的と研究手法を示し、使用したテキストを挙げた。本論文では地域差を明らかにするために民俗地図を作成した。地図作成のための基礎資料として当代地方志(「新志」と称される)を用いた。

第二章第 1 節では古代の経典『儀禮』における葬礼について儀式を時間軸に沿って図式化した。第 2 節では近世において士大夫の儀礼の規範とされた宋・朱熹『家禮』について述べ、第 3 節では『家禮』における葬礼を時間軸に沿って図式化して概観した。第 4 節では『家禮』を改編した明・邱濬『文公家禮儀節』について述べた。『家禮』は『文公家禮儀節』において儀式をマニュアル化した改編が行われたことにより広範に用いられるようになったとされる。

第 5 節ではまず、旧志を資料として、近世中国社会に『家禮』の影響が広汎に及んでいたことを検証した。次に『家禮』の規範から変化、逸脱した儀礼が公の記録である地方志に記されており、民間では広く行われている状況であったことを指摘した。

第 6 節では当代地方志に記載された伝統葬礼を時間軸に沿って図式化し、『家禮』と対照しながら概観した。伝統葬礼では『家禮』の儀礼が継承されたとみられる儀礼習俗が行われている一方、規範から変容、

逸脱した習俗が存在することを指摘した。

第三章、第四章では古礼や『家禮』には現れず、近世に民間で独自の特徴を発展させた葬礼習俗、及び『家禮』に規定された形態とは異なる儀礼習俗を取り上げ、地理的分布状況から歴史的変容の過程を推定した。

研究手法は、W・A・グロータース神父の提唱になる「民俗地理学」(folklore geography)に倣った。本来、この研究には調査によるデータ採録が必要であるが、「殯葬改革」が推進されている中華人民共和国では漢民族を対象とした葬礼の体系的な調査は行われてこなかった。本論文では次善の策として、地図作成のための基礎資料に安徽、福建、広東、広西、貴州、海南、河北、河南、湖北、湖南、江蘇、江西、遼寧、山東、山西、陝西、四川、雲南、浙江の当代地方志を用いた。このほか、明代、清代、民国期の地方志(「旧志」)や宋代以降の正史、筆記小説、白話戯曲等の文献を参照資料とした。

第三章では遺体の清めと更衣にかかわる儀礼習俗について論じた。

第1節では死装束を着せる「穿壽衣」と水を用いた遺体の清めに関わる「買水」、「淨面」を対象とした。

遺体の更衣に関わる儀礼は、『儀禮』、『家禮』では「襲」と称され、死亡後に行われる。しかし、当代地方志によれば、このような規範を継承する地点が全国に広がっている一方、死亡前に更衣を行う地点が北方地域に集中して現れる。(→地図2)

「買水」は死亡後、孝子(死者の息子)が川や井戸などへ行き、川や井戸の神を拝して水を汲んで持ち帰り、遺体の清めに用いる習俗である。遺体を洗う「沐浴」は『儀禮』、『家禮』にも記載がある。沐浴に用いる水に関して『儀禮』では井戸から汲むとされ、『家禮』には記載がない。また、いずれにも「買水」に関する記載はない。当代地方志の記述によれば、「買水」を行う地域は長江以南に分布する傾向である。(→地図3)

「淨面」もまた遺体の清めに関連する習俗である。入棺の前後に孝

子らが、水または酒で濡らした綿や布で遺体の顔を拭き清める。「淨面」は『儀禮』、『家禮』には現れない。「淨面」を行う地点は主に淮河以北の地域に現れ、密集して分布している。(→地図 4)

次に葬礼の中で関連して行われる「穿壽衣」、「買水」、「淨面」を葬礼の時間軸に沿って三類型に分類し、考察した。類型 A は本論文で「原型」とした『家禮』に則った体系である。地点頻度は最も高い。類型 B は死亡前に壽衣を着せる体系で、これを「北方型」とした。類型 C は「買水」を行う体系で「南方型」と呼ぶ。類型 C についてはさらに「買水」を行い、汲んできた水をどの時点で用いるかによって下位分類を行った。類型 C-1 は「買水」をして汲んだ水を沐浴に用い、その後、壽衣を着せる。類型 C-2 は入棺の際に顔を拭く等に用いられる。類型 C-3 は入棺の前後に用いられるが、直接的な遺体への清めの行為には用いられない。類型 C-2、C-3 は象徴的な儀式として行われており、「買水」を行う意味が変化していると考えられる。地点頻度は C-1 が最も高い。

第 2 節では『儀禮』等の古礼で行われ、『家禮』にも継承された「沐浴」と「淨面」との関連性について論じた。

『儀禮』、『家禮』における「沐浴」は、遺体の髪と身体を洗うとされている。当代地方志には遺体を清めるために「洗う」ではなく、「拭く」という記述が見られる。そこからわかることは以下の三点である。①「洗う」という方法は、広範囲に現れる、②「拭く」という方法は華中、華南と陝西省南部から四川省にかけての地域に分布する。一方、華北、中でも華北東部には殆ど分布が見られない、③「沐浴」に関する記述がない地域は華北に集中して分布する。(→地図 5) また、対象部位については、身体全体を対象とするのではなく、手、足等の局部を対象とするところがある。①身体を対象とする地域が華北を除く広範囲に分布する、②華北には手、足等の局部を対象とするところが集中して分布している。(→地図 6)

「沐浴」と「淨面」はいずれも遺体の清めに関わる習俗である。「沐浴」に関する記述がない地域と「淨面」を行う地域はどちらも華北に分布し、その分布地域は重なっている。(→地図 7) このことから、華

北では「沐浴」が衰退し、「淨面」がその役割を代替している可能性があることを指摘した。

第四章では「招魂」と「報廟」を取り上げた。「招魂」は『儀禮』、『家禮』では「復」と称され、呼吸停止後すぐに自宅で行われる儀礼である。「報廟」は死後、親族が廟神に死者の魂の到着を知らせに行く習俗で、『儀禮』、『家禮』にはみられない。「招魂」と「報廟」は従来、関連付けて論じられてこなかったが、本論文では近世の華北において、「招魂」が「報廟」に取りこまれる形で変容を遂げたと考える。また、「報廟」習俗の形成が「招魂」の変容を契機とするものであった可能性を指摘した。

第 1 節では当代地方志における「報廟」に関する記載の有無から、「報廟」が行われている地点は長江以北、特に河北、山西から河南、山東、安徽、江蘇にかけての地域に集中していることを示した。(→地図 8) 清代乾隆年間の地方志には『家禮』に現れない「報廟」に対して批判的な記述が見られる。しかし、それらの記述は、批判を加えつつも地方志に記述せざるを得ないほどに「報廟」が盛んに行われるようになっていたことを表している。

第 2 節では「報廟」の行き先について論じた。「報廟」は死者の魂が一定期間、冥界の役所である廟(城隍廟、土地廟、五道廟等)に留め置かれるという民間信仰に基づく習俗である。地方志によれば、①行き先として最も高い頻度で現れるのは土地廟である、②山西省中北部、河北省中北部・東部には五道廟へ行くという地点が集中している。(→地図 9) グローターース(1993:131)は、宣化市東南地域に見られる五道廟の様式が、五道廟の典型的様式(察哈爾様式)と土地廟が五道廟の役割を果たす河北様式の過渡領域のものであると指摘しているが、地図 9 はこの指摘を裏付けるものである。②の地域は、「報廟」の行き先が土地廟である地域の北側に位置しており、両者は隣接している。

第 3 節では古礼の「復」が「招魂」として一部地域に保存されていることを示した。第 4 節では「招魂」が変容した形態が存在することを明らかにした。地方志の記述からは、①「招魂」を行う場所が自宅

から廟に移った形態、②「招魂」を行う時間、即ち廟へ行く時間が変化した形態、③廟へ行き「還魂錢」と呼ばれる紙銭を燃やす形態がみられる。①では廟で「招魂」を行うことが「報廟」であると認識されており、これは本質的な変化である。③の形態は河北省石家庄地域に集中して現れるが、これは「招魂」の変容形態の一つであると推定した。

第 5 節では「招魂」と「報廟」の形態を五つの類型に分類し、歴史的変化を推定した。(→地図 10) A 類型は古礼や『家禮』の「復」を踏襲した形態である。A 類型は地点頻度が低く、近世において「招魂」習俗が衰退に向かったことを示す。B 類型は廟へ行き、「招魂」を行う形態で、さらに三つに下位分類できる。類型 B-1 は、「招魂」を行う場所を廟に移しながら、「死の直後或いは入棺前」に行うという時間は維持されている。この類型が「報廟」の起源となった可能性があることを指摘した。類型 B-3 は時間が後ろにずれ込み、「入棺後または死後二日目以降、出棺前」に廟へ行き、「招魂」を行う。類型 B-2 は廟へ行き、「還魂錢」を燃やすという特徴を持つ類型で、特定地域(石家庄地域)にだけみられる。最も地点頻度が高いのは C 類型である。C 類型の地点では「報廟」を行うが、「招魂」は行われない。「報廟」から「招魂」の習俗または概念自体が消失してしまっている。以上のことから、「招魂」と「報廟」に関わる類型は華北において A → B-1 → B-2、B-3 → C のように変化したと推定した。

第五章では現地での聞き取り調査に基づき、現在、民間において伝統葬礼がどのように継承されているか、その実態について報告した。調査は江蘇省北部地域(徐州市及び周辺農村地域、宿遷市沭陽縣、連雲港市東海縣)において 2008 年、2009 年と 2011 年に実施した。

第 1 節では調査地域における伝統葬礼について、当代地方志の記述に基づいて図式化した。第 2 節では国、省及び調査地域(市、県)の各レベルにおける殯葬改革について概観した。

第 3 節では聞き取り調査の結果に基づいて葬礼の現状を報告した。本調査地域では殯葬改革により火葬が義務付けられている。現況に合

わせて変容させたところはあるが、伝統葬礼は今もなお継承されていることを示した。

本調査地域での葬礼は、本論文で「大老執」と呼ぶ人々によって取り仕切られ、進行されるという特徴がある。第4節では大老執に焦点を当て、その役割と近年の変化について論じた。伝統葬礼の継承には、葬礼習俗を伝承してきた大老執の存在と、彼らと喪家との関係性が大きく関わっていることを指摘した。

第六章では各章の要点を整理し、本論文を総括して、今後の課題を挙げた。本論文は、「伝統の継承と変容」をサブテーマとして論じてきたが、中国における葬礼には、いつの時代にも規範の継承とそれからの逸脱、変容という二つの側面が存在した。このことは南北差を表す地図に最もよく表現されている。南北差は一方が規範の継承、もう一方が逸脱、変容である場合が多い。二十世紀に至るまで中国各地で行われてきた伝統葬礼は、先秦の古礼をも含む規範の継承とそこからの逸脱、変容の総体であったと言えよう。

漢民族の葬礼は一般に「地域により異なる」とされながら、地域差の実態について、従来は体系的な研究がなかった。本論文ではこれまで関連付けて論じられることのなかった葬礼習俗を取り上げ、それらの分布地域を明らかにし、形態を類型化することにより、変化の過程を推定した。しかし、本論文では民国期以前に出版された旧志や、他の文献資料に関する調査も十分であったとはいえず、今後の課題として挙げた。

最後に本研究の今後の展望を述べた。本論文では葬礼を取り上げて論じてきたが、伝統葬礼だけでなく、伝統婚礼についても規範を継承した儀礼習俗がみられる一方、儀式形態の変容や規範から逸脱した習俗があり、それぞれに地域差がみられる。今後さらに一つひとつの儀礼習俗について詳細な検証を行うとともに、葬礼、婚礼を儀礼の体系としてとらえることにより、総合的な研究に発展させていきたい。

Regional Difference and Historical Change in Chinese Funeral Rites: The Inheritance and Transformation of Tradition

Chinese funeral rites originate from those described in classical texts of the pre-Qin period, notably *Yili* (Book of Ritual) and *Liji* (Record of Rites), and in modern times, the simplified version of classical rites, *JiaLi* (Family Rituals) by Zhu Xi, became the norm among high-ranking officials. However, the common people have not necessarily obeyed this norm, and nonstandard regional customs have prevailed.

In this thesis I present the information gained from around 1,300 contemporary *Difangzhi* (local county records) in the form of folkloric maps, and discuss the historical change of funeral rites. This methodology supposes that spatial variations reflect historical change. In the discussion I also refer to such written sources as old Difangzhi, note-form literature and vernacular plays.

Particularly significant is the geographical North vs. South contrast appearing in the maps of *chuan shouyi* (wearing the death garment), *mai shui* (purchasing water), *jing mian* (purifying the face), and *bao miao* (reporting to a temple). I typologized the former three customs in terms of the relative time order, and argue for their relations with a classical rite *muyu* (bathing the death). As for *bao miao*, I propose a hypothesis that it may originate from the classical rite *zhao hun* (invocating the dead), and speculate the process of change by referring to the maps as well as written texts.

Traditional funerals are less common today. However, my field research carried out in the rural areas of North Jiangsu has revealed that they are still being practiced. The funeral customs have undergone significant changes compared to the traditional versions. Nevertheless the local descendants are making efforts to preserve their own culture.

学位論文審査報告書

平成２７年　７　月　９　日

１　論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専　攻　　人間社会環境学

氏　名　　山本　恭子

２　学位論文題目（外国語の場合は，和訳を付記すること。）

中国における葬礼の地域差と歴史的変化　－伝統の継承と変容－

３　審査結果

判　　定（いずれかに○印）　　合 格 ・　不合格

授与学位（いずれかに○印）　　博士（ 社会環境学・文学・法学・経済学・学術 ）

４　学位論文審査委員

委員長　　岩田　　礼　　㊞

委　員　　鏡味　治也

委　員　　森　　雅秀

委　員　　西本　陽一

委　員　　上田　望

委　員

（学位論文審査委員全員の審査により判定した。）

５　論文審査の結果の要旨

本論文は中国の葬礼の歴史的変化を、主に伝統葬礼の地域差に着目することで解明しようとしたものである。ここでいう伝統葬礼とは、中華人民共和国で刊行されてきた当代県志（新志）の記述が反映するもので、20 世紀前半に中国各地で行われていたものと考えてよい。筆者は、全国 1270 県の新志を収集・読解し、伝統葬礼を構成する個々の儀式、習慣を整理した上で、地域差が観察されるものについては、民俗地図を作成した。例えば、「穿寿衣」と呼ばれる儀式で、絶命の前に当人に寿衣（死装束）を着せる地点は、淮河以北に集中している。一方、沐浴のための水を河川や井戸の神に拝礼して求めて来る儀式―「買水」と呼ばれる―を行う地点は、主に長江以南に集中している。このような南北差は、方言分布や他の文化的特徴に関する地域差の基本的な構図とも一致している。また、明代以降の華北地域では、故人の親族が廟の神に死去を告げる「報廟」が普及したが、告げる相手の神様が土地神であるか、五道神であるかで、華北内部で地域差が観察される。

筆者はこのような当代県志（新志）の調査と平行的に、先秦の『儀礼』、『礼記』、南宋・朱熹の『家礼』を中心とする文献調査とその閲読を進めた。調査対象は、民国以前に編まれた地方志（旧志）、筆記小説、戯曲等を含む。『儀礼』に代表される古礼とその簡略版である『家礼』については、葬礼を構成する個々の儀式の流れを時系列に並べて図示している。これが中国の士大夫の間で遵守すべきものとされてきた“規範”であり、当代県志が反映する民間の伝統葬礼の流れをそれらと比較することで、規範からの“変容”と“逸脱”の様相が明らかとなる。地図上に可視化された伝統葬礼に関する地域差は、規範が継承された地域とそれからの変容ないしは逸脱が生まれた地域の差異である、と筆者は考える。

個々の儀式を葬礼全体の時系列に置くことで、地域差が反映する歴史的変化の要因や背景が見えてくることもある。この点に関する本論文の創見は主に二点ある。一つは死者に対する「沐浴」に関わる。『儀礼』などに描かれた先秦の古礼では、沐浴に使う水は家の井戸から汲んでくる。長江以南の華南地域においては、そこに川や井戸の神が介在する点が、古礼からの変容であり、また逸脱である。華北地域における逸脱は「穿寿衣」に見られる。即ち、絶命の前に死装束を着せてしまえばもはや沐浴をする余地はなくなる。そのため、華北では「沐浴」儀式を保存する地点が減少し、その代替として死者の顔や手足を拭く「浄面」と呼ばれる儀式が発達した。この儀式は死後、納棺の前後に行われるもので、筆者は“遺体の清め”という沐浴が有した本来の機能が象徴化したものと解釈している。

第二の創見は、明代以降華北の民間で発達したとされる「報廟」が古礼における「招魂」と歴史的継承関係があると推定したことである。「招魂」は死の直後に、家人が自宅の屋根などに上って故人の魂を天から呼び戻そうとする儀式として知られているが、華北地域でこれをそのままの形態で保存する地点は少ない。一方、最も頻度が高いのは、魂を呼び戻すという「招魂」の概念そのものが失われて、「報廟」の概念のみが残った地点である。従来はこの類型のみが「報廟」として知られていたため、「招魂」との関連が考慮されてこなかった。しかし、華北には「廟に行って招魂する」という地点が少なくない。しかも廟で招魂を行う時間が死の直後ではなく、翌日或いは入棺の前後にずれ込んでいる地点もある。これは「報廟」から「招魂」が抜け落ちるプロセスの過渡的段階を示す、というのが筆者の仮説である。

中国の葬礼については、中国のみならず日本にも『儀礼』と『家礼』を中心とする分厚い文献研究の蓄積がある。本研究はそれらを踏まえながらも、従来なかった観点と手法によって、新たな仮説を提示した点に意義がある。

中華人民共和国に至って、火葬の導入を中核とする葬礼改革が推進された。それ以前の伝統葬礼の体系は土葬を前提としていたため、この変革は体系そのものの崩壊を意味するかに見える。そこで、筆者は江蘇省農村地域での現地調査を実施した。本論文の最後はその調査報告となっている。そこでの結論は、調査地域では葬礼にも商業化の波が押し寄せているが、伝統葬礼の継承者がなお健在であること、また、廟は消えてもダンボールで廟を作って「報廟」を行い、火葬が普及しても棺桶を購入し、火葬で残った骨灰を寿衣などで覆って納棺するなど、事実上伝統葬礼を継承した形態が行われていることである。

審査委員会では、本論文に対して様々な意見が述べられた。死とそれに伴う葬礼は人類の普遍的な営みであるが、葬礼を行うことの本質的な意義は何であるか。筆者は、規範の存在とそれからの変容・逸脱という図式に従って論じているが、そもそも前提とすべき規範が民衆レベルで存在したかどうか。葬礼を取り巻く社会的背景、歴史的背景及び本論文では触れられなかった民間信仰について今後探求する必要があること、等である。しかし、膨大な地方志を網羅的に調査し、情報を地図上に可視化したこと、また中国葬礼の研究においては全く新しい視座から様々な仮説を提起していること、さらには農村地域の聞き取り調査を実践し、知られざる現代葬礼の実態の一端を明らかにしたこと、これらを総合的に勘案した結果、委員会全員一致により、本論文は学位論文として申し分のないものであることを認めた。